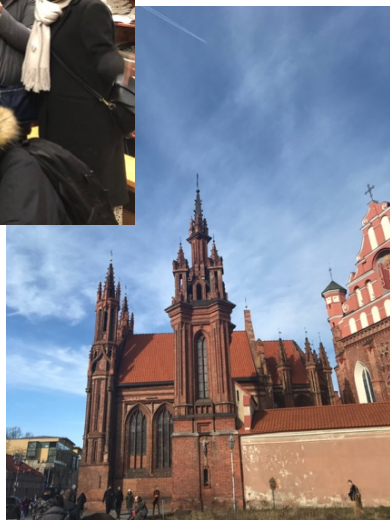




リトアニア・フィンランド
プログラム
2019. 3. 18～28



参加者プロフィール



山田剛暉(団長)
農学部生命機能科学科
2年



中田智士
経済学部経済学科
1年



田中雄大(副団長)
理工学部機能物質化学科
2年



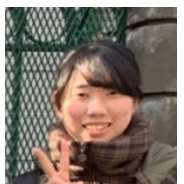
谷口遥香
農学部生命機能化学科
1年



大庭美里
理工学部機能物質化学科
2年



青木紗亜藍
農学部生命機能化学科
1年



安藤早織
教育学部幼少連携教育コース
2年



山崎祐佳
教育学部幼少連携教育コース
2年



香川拓美
医学部医学科
1年



高原颯大
経済学部経済法学科
1年

プログラム概要

【期間】2019年3月18日～3月28日

【留学先】ヴィタウタスマグヌス大学（リトアニア）、ヘルシンキ大学（フィンランド）

【内容】

<リトアニア>

- ・トラカイ城、杉原千畝記念館、第9要塞などの見学
- ・日本に興味を持つ学生団体「Hashi クラブ」との交流
- ・現地教師による、ホロコースト/キャリアデザインにつ

いての特別授業

- ・新たに設置された農学部の研究室見学
- ・約1週間のホームステイ

<フィンランド>

- ・フィンランドの教育システムについての紹介
- ・ヘルシンキ大学のキャンパスツアー、授業見学

リトアニアについて

面積：65000 km²

人口：281 万人

首都：ヴィリニウス

言語：リトアニア語

宗教：主にカトリック

欧州のバルト海沿岸に並ぶバルト三国のうちの1つである。過去にロシア、ドイツ、ポーランドによって植民地支配されていた歴史を持つ国で、第二次世界大戦中には、ナチスの悪事やシベリア追放など厳しく強力なソ連の支配下に置かれていた。1991年に完全に独立し、2004年にはEU加盟を実現させた。

日本との関係は伝統的にも良好で、ユダヤ人避難民に対して日本通過ビザを発給した杉原千畝についても広く知られており、親日感情を持つ人が多い。

リトアニアでの食事は日本人にとっても比較的食べやすいものが多く、物価も安いと、旅行しやすい国だといえる。

フィンランドについて

面積：338000 km²

人口：550 万人

首都：ヘルシンキ

言語：フィンランド語

宗教：キリスト教

北欧の東に位置する国で、国土の約3分の1が北極圏である。デザイン地区もあるうえ、豊かな自然にも囲まれている。また、社会福祉や教育へのサービスがとても厚く、すべての国民がこのサービスに対して共通かつ平等の権利を持つと考えられている。1917年独立、1995年にEUに加盟した。

日本との関係は良好で、2019年5月には外交関係樹立100周年を迎える。フィンランドでは日本食のお店が多くみられた。首都ヘルシンキはデパートが連なっており、比較的物価が高い。

ヴィタウタスマグヌス大学について

リトアニアの第2の都市であるカウナスに所在し、1922年に設立された国立大学である。学生数は8,700人、そのうち留学生は300人である。大学には、経済経営学部、自然科学

部、人文科学部、情報科学部、カトリック神学部、芸術学部、音楽アカデミー、政治科学外交学部、社会科学部、法学部、そして新たに設置された農学部の11学部がある。教養教育に力を入れており、30もの外国語教育を行っている。また、アジア研究センターがあり、そこはリトアニアにおける東アジア研究のハブとなっていて、アジア学を専攻する学生たちのクラブ活動が盛んに行われている。講義では、英語による多様な専門分野の学習ができる。佐賀大学の協定校のうちの1つである。

ヘルシンキ大学について

フィンランドの首都ヘルシンキに所在し、1640年に設立された国立大学である。世界の18,000の大学のうち100位以内に入る。学生数は31,312人、そのうち63%の19,826人が女子であり、女子学生の割合が高い。大学には、工学、法学、人文学、行動科学、社会科学、化学、計算機科学、数学、統計学、物理学、地理学、地質学、農学、生物化学、医学、薬学、獣医学、生物工学、宗教学、教育学と多くの専門分野がある。また、英語による多様な専門分野の教育を受けることができる。

「交流を通して得られたこと」

農学部生命機能科学科 2年 山田剛暉

私はリトアニア・フィンランド研修プログラムに参加しました。参加の目的は2つありました。1つはリトアニアと日本の関係やホロコーストの歴史について学ぶこと、もう1つはホームステイを通して異なる文化を直接体験することです。どちらにも新たな発見が多くあり、実際に現地へ行き、学んだり、体験したりすることの重要性を感じました。ここではそれら以上に印象に残った2つのことについて述べたいと思います。

1つ目はベジタリアンについてです。私はホームステイ初日、ホストファミリーのタウトヴィダスさんに、「今日は鴨肉の料理を食べたよ。とても美味しかった。」と話しかけたところ、反応はなく無視をされてしまいました。会話を続けていくと、実は彼はベジタリアンであるということが分かりました。おそらくそれが原因でリアクションに困ったのだと思います。もしくは不快に感じたのかもしれません。なぜ「不快」なのかというと彼は、「動物にも感情があり、痛みを感じる。人が生きていくのに動物を殺して食べる必要はない。」という理由でベジタリアンになったからです。自分の過去を振り返ってみると、このような倫理的な理由から肉を食べなくなった人と関わるのは今回が初めてでした。ベジタリアンの存在は知っているものの、認識の甘さからこのようなコミュニケーションの妨げを招いたのだと反省しました。もしベジタリアンについて理解していれば、たとえ同じような発言で相手を不快に感じさせても、その後のやりとりで自分の理解度を伝えることで信頼を取り戻すことができるだろうと思います。次の日、思い切ってベジタリアンとなったきっかけについて質問してみることにしました。彼の母もベジタリアンなので母の影響を受けたのではないかと予想していましたが、彼が十二歳のころ自分で肉を食べることに自然と倫理的な疑問を持ち、長い期間考えた結果ベジタリアンになることを決意したそうです。健康に生きるためにタンパク質は必要不可欠な栄養素であり、一般的に人はその摂取を動物の肉に頼っています。そのため、肉を食べずに生活すると決意することはハードルが高いと感じていましたが、彼が言うには難しいことではないそうです。なぜならば、スーパーに大

豆を加工して作った肉の代わりとなる、ソイ（Soy）と呼ばれる食品が安く売っており、それでタンパク質を十分に摂取できるからだそうです。私も実際にそのソイをホストファミリーから頂きました。食べてみて、とても驚きました。確かにこれがあるなら畜肉は必要ないというほど、味や食感を似せて加工されていたのです。その日から私はレストランのメニューを注意して見るようにしました。多くのレストランにベジタリアン対応のメニューがあり、魚肉を扱う寿司レストランでさえベジタリアンロールというメニューがありました。きっと、リトアニアではベジタリアンに対する認識が十分にあるのだらうと思いました。約1週間、ベジタリアンの方の食事を家庭内で体験できて非常に貴重な経験になりました。そして、リトアニアでは畜肉、魚肉がなくても満足して食事ができるのだと体験をもとに感じました。私は、一方で日本は倫理的、宗教的理由からベジタリアンになった人々に対して配慮ができていだろうかと考えました。これからは、観光だけでなく働く目的で来日する外国人がますます増加すると見込まれます。そんな日本において、様々なタイプのベジタリアン対応の食品提供は課題の一つではないでしょうか。また、私を含む日本人がどれだけベジタリアンのことを認識しているかが問われると思います。後にタウトヴィダスさんに聞いたところ、彼は目の前で畜肉、魚肉の料理を誰かが食べていても気にはならないと言っていました。しかし、嫌な気持ちになる人がいるかもしれません。私が言った不注意な発言のように無意識に相手を不快にさせ、信頼を失うことがないように理解を深める必要があると感じました。

2つ目はフィンランドで学んだ教育についてです。フィンランドは経済的、社会的要因から影響を受け、教育を重要視しています。私は教師を目指すヘルシンキ大学のロバートさんに、教師に必要なスキルは何か尋ねました。この質問をした理由は、私は教師にならずとも、いずれ何かを教える立場に必ずなると思ったからです。彼の回答は「Plastic (Movable) Brain」でした。彼の説明を聞き、私は「生徒の学習能力に合わせて臨機応変に教え方を変える能力」と解釈しました。つまり、分からないと困っている生徒がいれば、その教え方をあきらめ、別の効果的なアプローチを考え出し、切り替えるということです。このスキルは授業で用いる教科書を選んだり、カリキュラムを編成したりすることがで

きるフィンランドの教師ならではだと思いました。また、これは授業に限らず、教えるという行為全般に必要な能力だと思っています。説明をしても相手に理解してもらえない時は、言葉を単に言い換えるだけでなく、異なる視点から説明できないか、別のもっと効果的な説明方法はないかを柔軟に考えることが重要なのだと思いました。

以上の2つのことは、本来の目的とは違う場面で得られた大きな発見でした。今回のように現地へ行き交流することで思わぬ発見があり、様々な経験が得られるのだと気づきました。そして、その発見を深く理解するために、たとえセンシティブな質問であっても思い切ってする必要があると思いました。私はよく嫌われるのを恐れて質問をためらうことがあります。しかし、ためらったままだと、その相手との間に壁を感じながら関わっていかねばなりません。このプログラムでの経験を生かして、異文化や他の国のことを理解したい時には、相手の意見、考えを聞くということを意識したいと思っています。



ホストファミリーに作ってもらったソイを使った朝食

「若者の行動変容」

理工学部機能物質科学科 2年 田中雄大

私は2019年3月18日から28日の11日間、リトアニアとフィンランドに短期留学しました。主な目的は2つありました。一つは、私とは違う視点、価値観を持つ海外の人々と交流して、視野を広げることです。もう一つは、技術力、教育水準の高いリトアニアとフィンランドで、複合的な科学の在り方について学ぶことです。後者は、私の将来のビジョンに役立てようと感じました。

私は、留学先で、日本と、この二か国の共通点と異なる点は何かということを考えながら日々を過ごしました。その時に見つけた発見と、その発見から私自身の考えにどのような変化が生まれたのかについて述べようと思います。

日本とリトアニアの共通点は、エネルギーや材料を他国に依存して、他国より高い技術で作った製品を輸出するという点です。両国とも国土が小さく、資源が少ないので、急速なグローバル化に対応するべく、技術発展の道を進んでいったと感じました。

しかしながら、リトアニアで知り合ったジギスさんは、急速なグローバル化への対応の仕方では、日本とリトアニアの違いを感じていました。彼は、「日本は、グローバル化が進む前から、欧米の国に劣らないように、日々科学の発展を図った結果、今は先進国として、世界的にも高い技術を持ち、科学の世界でも活躍しています。ただ、英語力が乏しいです。それに比べ、リトアニアは日本ほどの科学力は持っていませんが、英語力があるので、先進国ではないけれど、日本に勝てる可能性があります。英語力が高いのはヨーロッパの特徴かもしれませんね。今後、私はこの強みを武器に、リトアニアを盛り上げていきたいです。」と言っていました。ただ、私は英語力よりも他国の文化を理解することが、グローバル化に対応できる最も大事な要因と考えているので、科学力はもちろん、これからは海外の人と積極的に関わりながら英語力を極めて、日本人の意地を示していきたいと思いました。

また、リトアニア人と話す度に、現地の方々とは他国への視野も向けているなと思いました。リトアニアは陸続きで、日本は島国というところが、意識の差を生んでしまっていると感じました。今はグローバル化が進んでいますし、陸続きでなくても、移動は容易になっているので、日本人が他国に視野を向けるようになることが、今後の日本発展の課題になるだろうと感じました。

ジギスさんとお互いの国の将来について話す中で、日本人は他国の歴史の考え方に偏見を持ってしまうことにも気づきました。留学メンバーでリトアニアについて勉強したとしても、私を含め沢山のメンバーがリトアニアに対して負のイメージを強く持っていたような気がします。それは、事前研修で読んだ本が、リトアニアでのユダヤ人迫害、ロシアを含む沢山の国からの侵略という内容が多かったからだと思います。ジギスさ

んは、「歴史をたどるとリトアニアが一番強い時期もありました。負のイメージだけはありません。」と言っていました。ジギスさんがこのように私に話したのは、目の前にある負の遺産をそのまま受け止めてしまう外国人が多いからだと思いました。それを払拭するべく、今後の若者が頑張らなければならない。小国であっても、他国に劣ってはいけないという考えが強くなっているのかなと思いました。

私はリトアニア人に、ユダヤ人迫害やロシアに対するイメージについて尋ねました。その結果、リトアニアの人たちは若者と年配の方で大きく変わっているということが分かりました。若者は、起きてしまった歴史を今後の糧として頑張らなければならないと思う人がたくさんいて、年配の方は、ロシア人を嫌う人が多いそうです。また、私は年配の方がドイツよりロシアに対する嫌悪感が強いことに驚きました。話によると、自由を奪っていたのはロシアだけで、ドイツは自由を奪いはしなかったみたいです。私の初等教育の時には第二次世界大戦の一番の悪者のようにヒトラーは扱われていたのですが、歪曲されて教えられた歴史は偏見を生みかねる危険なものだと思います。

このことから、相手国の歴史を勉強する時は、暗い部分と明るい部分の両方を知る必要があり、それを怠ると、他国の人と相互理解をするときに、行き違いが生じてしまう可能性があると分かりました。今後、歴史を勉強するときには、偏見を捨てて勉強しなければならないと強く思いました。

フィンランドでは、教育システムについて、勉強しました。私は海外の人たちの科学に対する考えが知りたかったので、とても勉強になりました。

まず、フィンランドの人たちは、フィンランドの教育システムを良いものだと考えていました。理由は、初等教育の時に、子供の好奇心を妨げないような楽しい授業かつ他の生徒と競争のない、すなわちストレスを感じさせない授業を提供するからです。

私はこのことを聞いて、日本の競争社会について、現地の方に説明し、どのようにすればフィンランドのような質の高い授業を日本で提供できるのかを聞きました。彼らは、「日本人の親が子供に対して成績を期待している状況が無くならない限り、競争社会は無くならないし、周りの生徒と比べるのではなく、個人個人に焦点を向けないといけないと思う。この状況を

打破するには、今後の若い世代の考え方が変わる必要がある。」と言ってくれました。

大通りで会うフィンランドの子供たちが、私に元気よく挨拶をしたりもしていたので、外国人への偏見を持たないような授業も提供しているのだろうと、私自身も感じました。このような形態がフィンランドを日本よりグローバルな国に仕上げていると感じました。

科学に対する考えについては、フィンランドでは、専門になればなるほど、物理と化学など、複合させて、研究していることが分かりました。理数系以外でも、複合型の授業に焦点を与えることを、本質としていたので、幅広いものの見方が、より良い発見や、研究につながるのだろうと思いました。

今回の短期留学を通して、ヨーロッパの研究動向を知ることができ、とても勉強になりました。それだけでなく、今後、グローバルな人物として、研究をするために、語学力強化に対する意欲も高まりました。ただ、海外の方の文化や考えを理解するには、語学力だけでは不可能なので、今後も、佐賀大学で、海外の方と交流を続けて、話す機会を設けていきたいと思います。今回は 11 日間の短期留学でしたが、今後機会があれば、長期の海外留学にも挑戦していきたいと思いました。



ヘルシンキ大学にて大学生に教育システムを聞く

「留学を振り返って」

理工学部機能物質科学科 2年 大庭美里

私は今回で2回目の SUSAP への参加でした。参加を希望した理由は1回目に参加して成長を感じることができたためもう一度参加したいと思ったのと前回見つけた課題を克服するためです。前回見つけた課題とは、英語能力がなくホームス

テイ先でコミュニケーションが上手く取れなかったことで
す。今回のホームステイでは前回の反省を活かして受け身で
はなく主体的に行動しようと心がけました。

今回の留学先はリトアニアとフィンランドで私にとっては
初めてのヨーロッパでした。このプログラムに参加していな
かったらリトアニアという国を知る機会はなかったかもしれ
ないと思います。リトアニアは最近独立した国なので道路が
整備されていなかったり、水が汚かったりといった発展途上
国のような感じを想像していました。しかし、実際に行って
みると道は整備されていたし、水道水もそのまま飲んで、日
本とあまり変わりなく、想像していたよりも発達している
という印象でした。そのため不自由なく快適に過ごすことが
できました。料理はもちろんお米はありませんでしたが、リト
アニア料理はシンプルで美味しくて私は気に入りました。ホ
ームステイ先でホストファミリーと一緒にリトアニア料理を
作るのが毎日の楽しみの一つでした。

また現地の留学生と交流する中でリトアニアという日本か
ら遠い国でも日本に興味、関心を持っている人がたく
さんいることを知りとても嬉しく感じました。私は日本語の
勉強をしているという海外の方には必ずと言っていいほど、
なぜ日本語を勉強しようと思ったのかとどのように日本語を
勉強しているかを質問します。彼らのほとんどが日本のアニ
メや漫画が好きでそのことがきっかけとなり日本に興味、関
心を持つようになったと言います。また、アニメを見たり、
漫画を読んだりすることが日本語を勉強する手段の一つにな
っていると話していました。私は日本のアニメにあまり興味
がありませんが、そのような話を聞いて日本のアニメ文化を
誇りに思うようになりました。その他にも日本車が走ってい
たり、お寿司屋に沢山の人が並んでいたりするのを見て、遠
い国だけど日本とのつながりを感じることができて嬉しかっ
たです。

大学のキャンパスツアーではリトアニアでは大学生まで授
業料が無料であり、しかもリトアニア国籍を持っていない留
学生に対しても国から奨学金が出るという話を聞きました。
日本の授業料は高く、国からの援助も少ないことで有名で
す。また、現地の大学生と将来の夢について話したりする中
でリトアニア、フィンランドの学生は国、社会のために働き
たいと考えているのに対して、日本人は将来のキャリアプラ

ンを自分中心に考えている人が多いことに気づきました。私
は日本人が自分中心に考えるのはこれが関係しているのでは
ないかと考えました。リトアニア、フィンランドのように国
からの援助がたくさんあれば、援助していただいた分、国の
ため、社会のために貢献したいとなるのではないかと思います。

今回の留学では、たくさんの人と関わり、多くの刺激をも
らえました。それと同時に、日本はとても恵まれた国である
ことを改めて感じました。普段生活していたら、それが当た
り前だけれど、その生活から離れると今までの当たり前の生
活のありがたさに気づくことができました。前回の課題も克
服することができたと思います。また今回の短期留学でたく
さんのひとに助けられました。沢山の人からもらった優しさ
や親切心を今後、自分自身も誰かに与えていけるような人
になりたいと思います。



ホストファミリーとの食事リトアニア料理を作りました

「リトアニア・フィンランドでの学び」 教育学部幼小連携教育コース 2年 安藤早織

私は、リトアニア・フィンランドプログラムに、海外のこ
とを知り実際に見て感じて、日本と比べたいという思いで参
加した。リトアニアでは平和学習、フィンランドでは教育に
ついて学んだ。

リトアニアで感じたことは、日本への関心が強いというこ
とであった。ヴィタウタスマグナス大学には、Hashi クラブ
があり、日本のことが好きな人が集まって活動をしていた。

リトアニアでは、日本の文化への関心が高く、特に漫画やアニメの人气が高く驚いた。

リトアニアで、事前学習で学んだことから、質問をした。リトアニア人は、リトアニアから海外に移住する人が多いと学んだが、現在もリトアニア海外に移住する人は多いと分かった。海外に移住した人はリトアニアに再び帰ってくことは少なく、お金を儲けるために海外に行く人が多いと分かった。次に、リトアニア人は、母国への意識が高い(母国を強く愛している)人が多いことを事前に学んだが、実際に聞いてみた。リトアニアは小国で、リトアニア語は世界の中で少数派の言語であるため、母国を愛する気持ちが強いと分かった。またリトアニア人は、やさしく、周りの人とのつながりが強いので、リトアニアのことを愛しているのだと分かった。次に、周りの国の影響や考えを質問した。本で、リトアニアはポーランドの影響を強く受けたと学んだが、現在はポーランドの影響は感じないと言っていた。ポーランドに対して、年配の方は、悪いイメージを持っているが、若い世代はそんなに気にしておらず、良いイメージがあると分かった。ドイツに関しても同じようだった。ロシアについては、少し嫌いと言っていた。

リトアニアで、ホームステイをした。ご飯は、一品料理が多く、日本との食文化の違いを感じた。ホームステイでも大学でも、「どうしたい?」と聞かれたときに、決めきれず、答えることができなかったことが多々あった。日本人はどちらでもいいと答えてしまうことが多く、答えを求められたときに答えられないのは日本人の特徴だと感じた。自分を強く持ちたいと思った。

リトアニアで、杉原千畝記念館、戦争美術館、ホロコースト博物館に行って、戦争の記録を後世に残しておくことは大切だと思った。戦争のことを見て聞き学び、平和の大切さを改めて感じた。また日本の戦争のことももっと知らなければならなかった。将来教員になった時に、子どもたちに平和学習をするときに生かしたいと思った。

フィンランドでは教育について学んだ。フィンランドで最も学びたかったことは、幼児教育と義務教育の接続についてだ。「基礎教育で子どもたちに不適應問題はないのか、また基礎教育で子どもたちの接続がうまくいかなかった場合、どのように対応しているのか」が知りたかった。フィンランド

でも、接続の問題はあるとわかった。例えば、プライマリースクールの1年生が、授業中に座っておくことができずに、歩き回る子どもがいる。その時は、椅子をバランスボールにしたり、椅子にクッションをつけたりして、座りやすいようにする。接続の問題を減らすために、プライマリースクール1年生の最初の時期に、学校での過ごし方を教えて、学校に慣れることが出来るようにしていると分かった。日本でも、幼小接続の問題がある。生活科を中心にスタートカリキュラムが行われている。フィンランドには就学前教育があることが、日本と違うが、小学1年生の不適應問題をなくそうとするだけではなく、子どもたちが学習をしやすい環境を作れるように柔軟に対応する視点が必要だと感じた。

フィンランド教育は特別支援教育に力を入れており、今後のフィンランド教育の課題は特別支援教育だと知った。特別支援の教員育成にも力を入れていることがわかった。フィンランドの教育制度で驚いたことは、義務教育にも留年があることだ。勉強が苦手な子どもたちには、個別指導で徹底的に教えるため、留年制度があると分かった。これが、フィンランドの学力が高い要因の一つであると感じた。

また、就学前教育は無償であるが、利用せず在宅育児を行う家庭もあるのはどうしてか聞いてみると、一つの地域に子どもが多いため、施設が足りない。そのため、遠くの施設に通わないといけなくなる。よって、所得の低い家庭は、在宅育児を行っている家庭もあると分かった。福祉国家のフィンランドでも、富裕層と貧困層の格差があると分かった。

ヘルシンキ大学には、パソコン室や広いソファがある学習スペースがあり、大学設備に驚いた。教育学部の教室は、理科実験室や工作室、機織り機が置いてある教室などいろいろな教室があり、様々な機械や道具が置いてあった。教師を育成する大学にこれほど多くの物を作る教室があることから、学校教育でも子どもたちが工作をする時間が多いと考えた。日本では、図工は副教科のような扱いで主要教科の方が重視されるので、フィンランドの教育制度との違いを感じた。

2か国に行って、感じたことは、自分から積極的に行動を起こすことが必要だということだ。外国人は、積極的にコミュニケーションをとることができると思い込んでいた。海外に行ってみると、思ったよりシャイな外国人が多く、話しかけてくれる人は少ないことがわかった。自分から話しかけた

り、行動したりしないと始まらないことがわかり、自分から行動することができた。話しかけることに苦手意識を持っていたが、リトアニアとフィンランドで多くの質問ができた自分に変化を感じた。質問をしたり、話を聞いたりして、日本との違いを知ることができた。これからも問題意識をもって学び、将来に生かしていきたい。



ヴィタウタスマグヌス大学の修了証をもらいました

「初めての北欧留学と新たな目標」

教育学部幼少連携教育コース 2年 山崎祐佳

今回の短期留学は私にとって3回目のSUSAP短期留学への参加となり、4回目の留学となりました。今までは主にアジア圏への留学が多く、実際に現地の大学の授業を受ける、というような活動が多くありましたが、今回はリトアニアの歴史を学ぶために博物館を訪れ、フィンランドでは大学の様子、教育の在り方を学ぶ、というような活動になりました。10日間という短い期間で充実した学習が行えるか不安ではありましたが、短期間であった分、自ら積極的にアクションを起こし、実りのある活動を行うことができました。

この短期留学に臨むにあたり、あらかじめ一つの大きな目標を立てて渡航しました。それはフィンランドへの長期留学へとつながるような10日間にする、ということです。私は大学に入学し、SUSAPに参加させていただくようになってから、短期ではなく長期で留学をしたいと考えるよう

になりました。そして私の専攻である教育学を学ぶには、ここ数十年PISA総合1位を数度獲得し各国からその教育力が注目されているフィンランドが一番だ、と考え、フィンランドをその留学先に決めています。今回の留学は3日ではありますが、フィンランドへ訪れることができる、ということで、現地の町の雰囲気や大学の様子をしっかりと見て、自分が留学した際にはどのような生活を送ることができるのか、学習環境はどのようなものなのかを知り、具体的に自分が留学した際のイメージを膨らませていきたいと考えました。

リトアニアでは全日ホームステイをさせていただき、現地の大学生のお宅に1週間おじゃましました。現地での生活や大学での授業の内容など、たくさん話をすることができました。韓国語を専攻している大学生2人のお宅でのホームステイでしたが、アジアの様子を発信することもでき、会話もスムーズに行うことができました。また、現地の博物館を訪れる機会にたくさん恵まれ、バルト三国の歴史や杉原千畝の功績をたくさんの写真や遺物を目に、学ぶことができました。社会科の教員を目指し、地理や歴史を勉強しているので、実際に博物館で目にしたものを間接的な体験談として児童・生徒に語れるようにと、できるだけたくさんの情報をメモに残しました。そしてフィンランドでは、活動自体は1日のみでしたが、非常に充実した時間でした。ヘルシンキの大学を訪れ、大学の授業の様子を見学させていただきました。一番驚いたのは学習環境の十分な確保です。キャンパスの至る所に学習スペースが確保されており、一人で静かな環境で学習したいとき、グループで話しながら授業の準備をしたいときなど、学生それぞれの状況にあった学習環境がいつでも提供できるように、何パターンもの異なった配置、空間のスペースが設けられていました。教育現場に携わることを目標としている者としては、学習環境の重要性を強く感じていますし、どのようにすれば児童・生徒が学習に集中できる環境が整うのか、ということには興味があります。今回のキャンパス見学はそういった意味でも非常に勉強になりました。そしてフィンランドに留学している佐賀大学の先輩方にもお話を聞くことができました。現地での生活や授業の内容など、自分が留学した際にためになる情報をたくさん頂いた。

10日間という短い期間ではありましたが、たくさんの方々にお世話になり、たくさんの学びを得ることができました。何よりも、長期留学への意欲がさらに高まったこと、そして教育というものへの関心が高まったこと、その他にもこれからの大学生活を変えてくれる体験がたくさんありました。残り半分の大学生生活と目標としている長期留学に向けて努力していきたいと思います。



リトアニアで訪れた城跡ツアーの様子

「リトアニア・フィンランドでの学び」

医学部医学科 1年 香川拓美

このリトアニア・フィンランド研修プログラムに参加した目的は主に3つあった。1つ目は、リトアニアは杉原千畝がビザを発行したこと以外に知識がほとんどなく、リトアニアという国について知りたいと思ったこと。2つ目は、フィンランドは福祉・医療が進んだ国だと聞いていたため、フィンランドでの福祉・医療制度について学び日本と比較したいと思ったこと。3つ目は、自分の英語でコミュニケーションをとる能力を知り、課題を発見し、これからの英語能力向上に生かすことであった。

1つ目のリトアニアという国については、歴史や教育、文化など様々な面から学ぶことができた。特に印象に残ったことは、リトアニアの若い世代の人は英語を流暢に話することができるということだ。一方で、40代以上の人はあまり英語を話していない印象を受けた。私のホストファミリーは17歳と11歳の女の子と40代の両親という家族構成の家庭だ

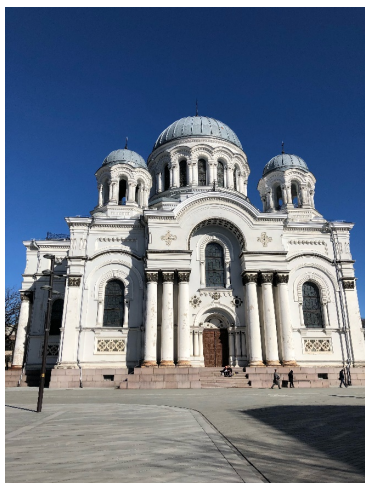
った。子ども2人は英語を話すことができたが、両親は英語を話すことができないと言っていた。年代によって英語能力に大きな差があることに疑問をもち、その理由をホストファミリーに尋ねた。すると、ロシアからの独立の前後で教育制度が変化したからだと話してくれた。リトアニアの学生は、ロシア統治時代は、第二か国語としてロシア語を学んでいたが、独立後は第二か国語として英語を学んでいる。現在の日本では年代によって、学んだ科目に歴史的な要因による大きな違いは見られない。しかし、リトアニアでは歴史が教育に与えた影響が顕著にみられると感じた。

2つ目のフィンランドの福祉・医療制度については、出産・子育ての支援施設であるネウボラについて詳しく学ぶことができた。ネウボラについては事前に読んだ本で、妊娠から出産、育児の時期まで定期健診や相談ができる施設だと学んでいた。日本にはネウボラのように妊娠から出産、育児の時期まで子どものいる家庭を一つの場所でサポートする施設がない。日本では、妊婦は産婦人科のある病院などで定期健診を受け、出産し、子どもが生まれたら各自治体の保健センターで三か月検診などを受診する。子どもができた家族は病院や保健センターなど様々な施設に行く必要があり、精神的負担が大きい。一方でネウボラでは出産から育児の時期の母子の検診が行われるため、病院など他の施設に行く必要がなく、家族の負担が少ない。フィンランドの妊婦の、ネウボラでの定期健診受診率がとても高いことが書かれていたが、なぜネウボラはフィンランドの人にとって身近な存在になることができたのかが疑問だった。ヘルシンキ大学の学生とのディスカッションでは実際にフィンランドで暮らす人の生の声を聞くことができた。ネウボラは子どもやその母親だけでなく、子どもがいる家族全体をサポートする。ネウボラには22歳未満対象の青少年ネウボラや22歳以上対象の家族計画ネウボラ、言語障害セラピーなどがあり、幅広い世代に対応している。また、幼い時からネウボラに行くことで、成長して青少年や大人になってからも行きやすくなっている。

3つ目の英語でのコミュニケーション能力については、自分の英語能力を客観的に見て、課題を見つけ、新たな目標を設定することができた。この研修中、積極的に自分の考えを相手に伝え、質問して疑問を解決したいと考えていた。しかし、ホストファミリーに日本人の多くは恥ずかしがり屋で、

私も恥ずかしがり屋だと言われた。オープンマインドで英語を多く話すことを心掛けていたにもかかわらず、恥ずかしがり屋と言われ、少しショックを受けたが、なぜ私が恥ずかしがり屋だと思われているか考えるきっかけができた。街の中で知らない人と目が合った時、日本人の多くは気まずくて、すぐに目をそらす。これは、日本の文化の一つかもしれない。しかし研修中、日本人ではない人の中には、知らない人と目が合った時に、相手に微笑みかける人がいた。私も知らない人と目が合った時、目をそらしてしまう。相手が笑顔を見せてくれると自分の存在が認められて、幸せな気持ちになると気づいた。英語による会話だけでなく、態度にも英語コミュニケーション能力が表れていると感じた。英語を話すときは、日本語を話す時より、笑顔や手ぶり身振りによって態度をよりオープンにして相手への関心を表現できるようになりたい。英語会話自体についても多くの刺激を受けることができた。リトアニア・フィンランドの学生は、私と同じように第二か国語として英語を勉強しているが、私より流暢に英語を話していた。ホストファミリーの女の子は友人との会話でも時々英語を使うなど、日常の中でも英語を話していて、英語を話す機会が多いことが分かった。日本では英語の授業以外に英語を話す機会が少ないが、英語を使うボランティアに取り組むなどして、日常生活に英会話を取り入れたい。

今回の研修では、事前に考えていた3つの目的を達成することができ良かったと思う。実際にリトアニア・フィンランドに行かなければ、このような疑問や経験、新たな目標はえられなかった。今回立てた新たな目標達成のため努力し、会話だけでなく態度も含めた英語コミュニケーション能力を高めていきたい。



リトアニアの聖ミカエル教会

「留学を経験して」

経済学部経済法学科 1年 高原颯大

私がこのプログラムに参加しようと思ったきっかけは今まで海外に一度も行ったことがなく、このプログラムが初めて日本を出る良いチャンスだと思ったからだ。また、幼い頃からヨーロッパの歴史に強く興味があり今回訪れる国がリトアニアとフィンランドということで自分の興味にピッタリだったからだ。そして、参加するからには主体的に様々な人と交流しようという目標を持って参加した。

正直、リトアニアに着くまでは最近ソ連から独立した国であり、寒い地域にあるため、街は閑散とし、閉鎖的という勝手な印象を持っていた。しかし、実際に訪れてみると、街にはたくさんの人がいて活気があり、インフラ整備もしっかりとされており、1週間の生活において日本からきた私でも何ひとつ困ることは無かった。そして、首都ヴィリニユスの中心地では世界遺産に登録されている旧市街の昔ながらの美しい風景とパリのシャンゼリゼ通りのようなモダンな景色を見ることが出来た。

また、日本に関係がある様々なものが多くあるのも印象に残った。リトアニアでの生活の中で日本車に遭遇することは当たり前であり、寿司屋に関しては日本とスタイルは異なるものの日本より数多く店舗があり、母国日本の世界的な影響力の強さにもっと誇りを持つべきだと思った。

現地で関わった学生は日本について興味をもっており、思っていた以上にうまく日本語を使いこなし、日本についても私たちと違った目線で物事を捉えているため、関わるなかで私自身自分の国について知らないことが沢山あるということを実感させられた。そして、他国の人から見た日本の不思議で理解できない点についても知ることができ、とても斬新な気持ちで自分の国を見つめるという日本では出来ない経験をすることができた。

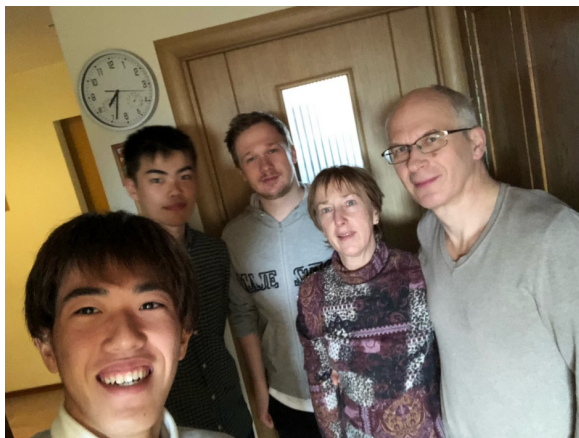
その他に現地では寮や街で多くの人と交流する機会があり、寮ではインドの方からカレーをご馳走になったり、アゼルバイジャンの人と卓球を楽しんだりと関わってもらった多くの方がとても暖かく、親切で、日本という国に対して興味をもってたくさんの質問を私にしてくれたことがこのプログラムを通して一番私自身が嬉しかったことである。言葉は上手く

通じなくても、様々な手段でコミュニケーションを取って楽しめるということを知れたことは人生において大きな収穫にもなった。

そして、現地の人達と交流する中で彼ら自身の国に対する誇りや感謝、これから自分達が国を良くしていくという向上心を強く感じた。私はこれが今の日本に足りない最も大きな要素ではないのかと思った。これは、国の教育に対する姿勢にも現れていると感じた。例えば奨学金制度。日本において奨学金は借りるものであるが、リトアニアやフィンランドでは返済の必要はなく、若い人達に対する投資として考えられていた。これでは日本の若者が国のために貢献出来るように努力しようとするとは思えない。私自身、奨学金を借りている身なので、現地の奨学金を非常に羨ましく思い、日本でも導入すべきだと強く感じた。

さらに、現地では自らの国の歴史や未来についてどのように考えているかという問いを投げかけることで、本やインターネットでは知ることの出来ない生の意見を聞くことが出来た。特に驚いたのが第二次世界大戦中にリトアニアを支配していたドイツに対する否定的な意見がほとんどなかったことである。その他にも様々な意見を聞いて自分なりに考えた結果、ヨーロッパの歴史というものの印象が大きく異なったものになった。これもまた、今回のプログラムで得た大きな収穫の一つである。

最後にこのプログラムの中で関わってくださった全ての方が暖かく受け入れてくださったことに感謝すると共に、いつかは恩返しが出来るように私自身目標を持って日々努力し、夢に向かって突き進もうと思った。



ホストファミリーとの記念写真

「心を開くことの重要性」

経済学部経済学科 1年 中田智士

今回のプログラムでは、多岐にわたり様々な事を学習できた。その中でユダヤ人への迫害、杉原千畝の業績、現地の人々のロシアへの意識、そして外国人との交流の4つについて考察する。これら4つの事柄を通して私は「他者に対して心を開く、相手を知ろうとする」ことの重要性を認識するに至った。

リトアニアではユダヤ人迫害の歴史、そして彼らを救おうと行動した杉原千畝に関して重点的に学習できた。特別授業ではホロコーストの経緯について詳しく教えて頂いた。第二次大戦下、民族を消し去る程だった彼らへの迫害はナチス時代を通してひどかったものではなかった。第一次大戦後、ドイツ人は社会や経済の不安や不満の捌け口をユダヤ人に向けた。ドイツ社会の中で異質な存在だった彼らへの迫害は営業妨害や罵りから、最終的に強制収容所へ送られるまでに発展したという。最初はストレスの発散だったものが、だんだんと憎しみに代わりエスカレートしていったのだ。先生は、このような悲劇を防ぐために未知の他者に関心を持ち理解しようとするのが大事だと述べられた。相手に対して理解や思いやりがあれば、理性をもって差別や迫害を思いとどまることができるようになる。

現地で杉原千畝を称える碑や何人ものリトアニア人と出会った。最初は彼がとても有名だったことに驚いたが、彼について多くを学ぶうちにその理由が理解できた。約6000人ものユダヤ人を救うために行動したことは知っていたし、それまではもし自分も彼のような状況にあればそうしただろうと考えていた。だが、今、当時の状況を知ったうえで私が彼と同じ行動がとれるかと言われれば怪しい。彼は、故郷から遠く離れた地で戦火が迫る中で家族を抱えながら自国に背いてまでも行動したのである。日本はドイツと同盟を結んでいたため、反逆罪で家族が危険にさらされるかもしれなかった。ドイツの人々がユダヤ人虐殺に声をあげられなかったのと同じように、誰しもができることではない。彼は一人の人間として過酷な立ち位置にいる人々を想い、自らの危険も顧みず救おうと働いた素晴らしい人物である。

リトアニア、そしてフィンランドでもロシアに対してどのような意識でいるのか尋ねたが返事は意外なものであった。彼らは今までロシアの脅威に晒されてきたためロシアを嫌っているのかと思っていたが、ロシアに対する思いや姿勢は未来志向であった。リトアニアではホストファミリーや大学の教授などに質問できた。国としては怖い嫌いだが、ロシアの人は好きであり、また経済の重要なパートナーなので良好な関係を維持したいという意見だった。フィンランドではヘルシンキ大学の生徒に質問し、彼はロシアがEUと同じぐらいに重要なパートナーであると答えた。帝政時代にフィンランドで活動したレーニンのおかげで独立できたこともあり、悪い印象はないらしい。リトアニアでは2015年に徴兵制が復活したこともあり、ロシアに対する敵対感情が多くみられると思っていた。今回話を聞いた人達は普段からロシア出身の学生などとの交流もあり、ロシアが全くの敵だとは捉えていなかった。日本も東シナ海での問題など日中関係は微妙だが、私自身中国の留学生の友人がおり中国が素晴らしい国だと理解している。人同士の交流によって相手国への理解が深めることは、国同士の関係を発展させるうえで重要だと感じた。ただロシア人との交流を持たない人々の対露感情について今回知ることができなかったし、フィンランドは国レベルでロシアと良好な関係を持っているにしてもリトアニアではそうとも言い切れない。人同士の交流は将来、国同士の関係を発展させるだろうが現在の政治や経済などの軋轢等の解決は簡単にはいかない、だから政治学をこれから先勉強してこの問題については考えたい。

このプログラムを通して様々な人と交流することができ、少し怖いと思っていた海外の人との交流が楽しく、そしてもっと交流したいと思えるようになったことは自分の中で大きな進歩だと感じている。海外の人、特に白人に対して私は若干の恐怖心があった。なぜならまず一緒に暮らすこともない上に、近代史で彼らによる人種差別を知り、またアメリカやイギリスなどで現在もそれが続いているからである。また、他にも最近白人に日本の技術や文化などを礼賛してもらうTV番組が多いため、そういう番組への嫌気も相まって白人という異質な存在に少し恐怖を感じていたのである。しかし、彼らの国に行き少しの間だが彼らとともに生活する中で、当たり前だが彼らも同じ人間であると実感でき、私のたどたどし

い英語に対しても真摯に耳を傾けてくれたことは本当に嬉しかった。今まで日本で本やテレビを通して彼らを分かった気になり、勝手に恐れを抱いていたのが馬鹿らしい。しかしこれは相手を知らない場合に多くの人が共通して抱く感情なのではないかと思う。実際に現地に行き、相手の社会や文化を知ることは他国の人を理解するうえで最良の方法だと感じた。

私がこのプログラムに応募したきっかけは、長期留学を見据えて海外の大学と大学生活がどういったものかを経験したかったからだったが、予想していた以上の多くのことを学ぶことができた。特に私がこの11日間の旅で最も大事だと感じたのは、他者に対して心を開き、相手を理解しようと行動することである。ホロコーストの歴史から多外国の人との交流まで心を開くことが他者との相互理解に欠かせないものだと身をもって体感した。そして、それをスムーズにしてくれるツールが「英語」なのだというのも。今回、多くの人と会話することができたが自分の英語の未熟さを痛感し、また、そんな私に親切にも対応してくれた現地の方々に心から感謝する。長期留学に向けて、英語をもっと勉強し、そしてさらに留学生など海外の人と交流していきたい。



リトアニアで親切に面白く

様々な場所を案内してくれたジギスさん

「11日間の体験」

農学部生命機能科学科 1年 谷口遥香

私がこのプログラムに参加した目的は、大きく2つあります。1つ目は、リトアニアの文化や歴史、フィンランドの教育について実際に現地に行って学ぶことです。日本にいただけではわからないことをたくさん吸収して、自分の視野を広げたいと思いました。2つ目は、大学生のうちに自分に自信をつけることです。現地の学生への質問やディスカッション、さらにはホームステイを通して少しでも自信をつけたいと思い、今回参加することを決めました。私はこの2つの目的を念頭にいたうえで、2ヶ国それぞれと日本とを比較しながら過ごしました。ここでは、私は3つのことについて述べようと思います。

1つ目は、リトアニアの人々についてです。私にとっては初めてホームステイで不安もありましたが、ホストのディアナさんが私をすぐに迎え入れて下さいました。最初は、緊張して自分から話すことができず食事中も静かな時がありましたが、自分のできる限りの英語を使って話しかけていくと、日が経つにつれてコミュニケーションをとれるようになっていったのが嬉しかったです。しかしながら、私の口からは簡単な英語しか出てこないため、話したい内容を明確に伝えることができなかつたのがとても悔しく、自分の英語力の足りなさを痛感しました。また、ホストファミリーだけでなく、現地の大学生やリトアニア人と関わった際、どの場面でも日本人の私たちのことを温かく受け入れて下さり、親切にしてくださいいただいたのがとても印象的でした。そして、日本大使館の方もおっしゃっていましたが、杉原千畝の影響もあるためか、日本に興味を持っているリトアニア人が多かったように感じました。日本に興味を持っている学生団体「Hashi クラブ」の中には、日本人以上に日本の歴史や文化について知っている人もいて驚き、それと同時に、私も自分の国についてより知っておくべきだと感じました。

2つ目は、リトアニアでの平和学習についてです。リトアニアの歴史については事前に本を読んで学習していましたが、実際に当時のままで残されている建物や武器、銃の痕跡などを見て、日本で学ぶ戦争とは違った恐ろしさを感じました。また、リトアニアと日本についての話になると、必ずと

いっていいほど杉原千畝の名前が出てきました。リトアニア人にとって杉原千畝は、記念館が作られるほどに尊敬、感謝されている人だと感じ、日本人として改めて誇りに思いました。そして、リトアニア人は自分の国のことを大切に思っていて、母国の歴史についても理解されていました。リトアニアは陸続きのため、リトアニア人は戦時中に関わった他国への意識が今でも高く、島国である日本とは異なるように感じました。

3つ目は、フィンランドのヘルシンキ大学で学んだ教育についてです。フィンランドは、国民全体が教育についての意識が高い国であるのは事前に本を読んで理解していましたが、教授や学生からお話を聞いたり、実際に行われている授業や大学内の設備を見学したりして、日本と異なる部分を多く感じ、フィンランドの教育に対する強い姿勢を実感しました。例えば、学力の向上を目的とするよりも子供の成長に合わせた教育を行う点や、多様性のある自由な教育を行う点、実技を中心とした教育が多い点など、フィンランドの教育は日本と比べてうらやましい点が多いように感じました。しかしながら、その一方で教育において課題はないのかと思い、ヘルシンキ大学のヘイディ教授に質問してみると、課題は多くあると考えられているようですが、その中でも教員の数が減少していることと、生徒の平等性について挙げられました。特に、宗教の問題などにより歴史を教えるのが難しく、歴史分野の教員が減っているようです。私は、宗教の問題が教育に関わっているのは、多文化であるヨーロッパを代表する教育国であるからこそ、そして、グローバルな教育が進んでいる国だからこそその課題であると感じました。日本は経済大国でありとても恵まれています、教育においてはレベルがまだ低いのが現状であるため、このようなフィンランドの教育を参考にしながら、国の文化に沿って教育が行われるべきだと思いました。

この11日間は、私にとって本当に濃い時間でした。ヨーロッパの文化、歴史、教育を肌で感じる事ができ、異文化を体験する良い経験になりました。また、このプログラムに参加する前までは、私は自ら進んで人前に出ることが苦手だったうえ、英語でコミュニケーションをとるのが上手くないと思い込んで発言するのをためらっていましたが、どの場面においても自分から積極的に発言をする機会が多く、気づけ

ば現地の方と自然に会話ができていた自分に私自身も驚きました。今回の経験を活かして、より英語力を向上できるように努力するとともに、様々なことに積極的に取り組む心を大切にしていこうと思います。



ヘルシンキ大学にて現地の学生に質問をする

「文化の違い」

農学部生命機能科学科 1年 青木紗亜藍

私はリトアニア・フィンランドプログラムに参加して、それぞれの国の良さを見つけることが出来ました。初めての海外だったけど、日本での生活から離れて実際に海外の生活を体験することで、日本にも取り入れたい点を見つけることが出来たし、日本では当たり前のようにやっていたことがありがたく思えるところもありました。

リトアニア人は、人とお別れをする時にハグをしていました。日本では「さようなら」とか「またね」と言って別れるのに対し、リトアニアではハグをし合って感謝の言葉やお別れの言葉を告げていました。私はそれを見て、自分はやっていないのに嬉しい気持ちになりました。愛の大きさは日本とリトアニアで差はないと思うけど、ハグした方が周りから見ている人思いが強く見えるなと感じました。

リトアニアの道路には路上駐車された車が並んでいました。辺りには駐車場がなく、路上駐車が当たり前なのかなと思いましたが、日本で路上駐車をやると罰金が課せられます。路上駐車すると事故の原因にもなりとても危険なのに、それを当たり前に行っていたので文化の差を感じました。また、横断歩道がない所を車が来ているのにリトアニア人は平気で横断していました。日本では危険すぎてできないけど、これは

リトアニア人同士の信頼関係の証なのかなと思いました。しかし、お酒に関しては販売時間に規制がありました。平日と土曜日は20時、日曜日は15時までしかお酒は買えません。消費量を削減する目的だそうですが、それによってお酒の飲みすぎや、夜の治安の悪化を防ぐことも出来ると思いました。これは良い取り組みだと思うし、この取り組みが世界に広まっていったらいいなと思いました。

フィンランドのヘルシンキは、デパートのような大きな建物が多く、ブランドのテナントが多かったです。また、リトアニアに比べ物価は高く感じました。税金が高い分、物価も高く感じるけど、税金は国民のために使われていると考ええると少し高くても買うことにためらいを感じることはあまりない気がします。

ヘルシンキ大学は佐賀大学と違い、縦に長くらせん階段がありました。大学の授業は、日本と似ていてパワーポイントを用いてされていたけど、生徒はみんなパソコンを常に机の上に置いている所が違っていました。日本ではノートをとる習慣があるけど、私の場合はノートをとる方が記憶に残りやすいなと思いました。また、授業内容が工具を使って作品を作ったり、編み物をしたりなど、小学校の工作の授業みたいでした。座学だけでなく、実際に自分でやってみると理解しやすく想像しやすくなるのでいい授業だと思いました。

日本にいただけでは分からないことも今回の留学で多くの知識を得る事ができ、挑戦する勇気も持てました。これからためらわず色々なことに挑戦して行こうと思います。



リトアニアで毎日お世話してくれたジギスさんとの写真